

様式第6号 (第5条関係)

政務活動費実績報告書

令和元年7月31日

久慈市議会議長 様

会派名 新政会

代表者名 澤里富雄



政務活動費の交付に関する条例第8条の規定により、次のとおり報告します。

使 途	<input checked="" type="checkbox"/> 調査研究費	<input type="checkbox"/> 研修費	<input type="checkbox"/> 広報費	<input type="checkbox"/> 広聴費	<input type="checkbox"/> 要請・陳情活動費
	<input type="checkbox"/> 会議費	<input type="checkbox"/> 資料作成費	<input type="checkbox"/> 資料購入費	<input type="checkbox"/> 人件費	<input type="checkbox"/> 事務所費
実施期間	平成31年5月7日～9日				
実施場所	岩手県庁、気仙沼市役所、三陸鉄道株式会社				
参加者名	澤里富雄 (会長)・上山昭彦 (幹事長)・泉川博明・山田光・岩城元				
実績額	137,720円 ※取扱料金(5,400円)を除く				
内 容	別紙のとおりに記載しております。				

令和元年7月31日

久慈市議会

議長 中平 浩志 殿

令和元年度

久慈市議会「新政会」視察研修報告書

新政会

会 長 澤里 富雄

幹事長 上山 昭彦

泉川 博明

山田 光

岩城 元

「新政会」会派視察研修を実施したので、次のとおり報告する。

- 1、 視察期間      ・平成31年5月7日（火）～平成31年5月9日（木）
  
- 2、 視察先        ・岩手県商工労働観光部観光課  
                  ・気仙沼市役所  
                  ・三陸鉄道株式会社
  
- 3、 研修議員      ・澤里 富雄  
                  ・泉川 博明  
                  ・上山 昭彦  
                  ・山田 光  
                  ・岩城 元
  
- 4、 研修事項

（1）岩手県商工労働観光部観光課

- 岩手県の観光について
  - ・岩手県の観光産業について
  - ・沿岸地域の観光産業について
  - ・三陸鉄道と観光産業の関わりについて

（2）気仙沼市役所

- 三陸ジオパークについて
  - ・「三陸ジオパーク気仙推進協議会」の活動内容について
  - ・ジオパークガイドの養成とガイドの活用について
  - ・ジオパークを活用した交流人口拡大について

（3）三陸鉄道株式会社

- 三陸鉄道リアス線開通について
  - ・南北リアス線統合によるメリットについて
  - ・リアス線と観光の関わりについて

## 視察研修内容 (1)

日 時	平成 31 年 5 月 7 日 (火) 午後 1 時 30 分～午後 3 時 00 分
視 察 地	岩手県 商工労働観光部 観光課
視察先住所	岩手県盛岡市内丸 10 番 1 号
応 対	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岩手県 商工労働観光部 観光課 参事兼総括課長 浅沼秀行 様</li> <li>・公益財団法人さんりく基金 DMO事業部 副部長 三上克好 様</li> <li>・岩手県議会事務局 総務課 総務経理課担当主査 佐々木武範 様</li> </ul>
説 明 者	・岩手県 商工労働観光部 観光課 参事兼総括課長 浅沼秀行 様
視 察 目 的	岩手県の観光について

### 概要 (岩手県の観光について)



- 到着後すぐに研修開始。

- 観光課総括課長の浅沼様より説明をいただく



- 熱心にメモを取る会派議員

概要



- 積極的に質問をする会派の各議員



- 岩手県議会議事堂前にて集合写真

## 所感

### ○ 岩手県の観光産業について

久慈市総合計画の基礎戦略3では、当市観光の振興が示され、その中で施策の方向として、観光産業は、地域内にある全ての産業を集約した総合産業であることから、さまざまな業種との連携を図り、産業全体の振興に努めるとしている。また、観光ガイドの養成や各種体験・交流型の観光を推進することにより滞留性・周遊性を高めるための取り組みを行う、とも示されている。

そこで岩手県の取り組みを見てみると、県では「みちのく岩手観光立県第3期基本計画」をさだめ、観光産業を地域経済に好循環をもたらす総合産業として確立するとともに、観光消費の拡大を図り、県経済の活性化を目指すこととしている。さらに、観光事業者のみならず、農林水産、文化、スポーツなど多様な主体の参画による観光地づくりを促進するとともに、域内調達を高めるなど、産業間・分野間における連携強化を図ることにより、観光産業を地域経済に波及をもたらす総合産業として確立し、観光で稼ぎ、観光で潤う地域づくりを推進することを掲げている。

これらのことから久慈市と岩手県の観光施策の方向性が合致していると認められ、県の観光振興として具体的に示されている「みちのく岩手観光立県第3期基本計画」を中心に、総合産業としての観光について研修を行った。

「みちのく岩手観光立県第3期基本計画」は、10年後の実現すべき姿を展望して、2019～2023年度にかけての5年間の計画を策定したものであり、岩手県内経済の活性化を目指すとしている。

本県の観光を取り巻く現状と課題では、全国的には日本人旅行者と観光消費額は横ばいであるが、訪日外国人旅行者とその観光消費額は増加傾向にあり、本県においても同様に、観光入込客数、宿泊客数は横ばいではあるが、外国人宿泊者数は急増しているとの説明があった。

当市に於ける訪日外国人客の推移を計るデータは無いようではあるが、久慈駅や市内周辺観光地を目にして推測してみると、以前に比して外国人観光客を確認にすることは増えてきてはいるが、内陸部の平泉周辺や八幡平周辺に比べた場合、その数には、相当の開きがあり、沿岸県北部地域を含めた久慈市への、訪日外国人観光客の誘致には、県としての具体的な施策の推進と、当市においても県と連携しての訪日外国人客の誘客へ

の対応が急務と考える。

また、教育旅行における入込は、県全体としては震災前に比して増加傾向にあるようだが、当会派の一般質問等の答弁によると、当市の教育旅行者数をみると、近年、減少傾向にあることから教育旅行先進地としての当市としては、これまで来ていただいている学校はもとより、さらに範囲を広げるなど施策を検証し直してみる必要がある。

人口減少が続く現状において、教育旅行として訪れていただける回数は同じでも、子どもの減少により、一度に訪れる人数の減少は避けられないことから、教育旅行として訪れていただける学校数の増加を図る施策も不可欠である。

さらに岩手県は、二つの世界遺産、「平泉の文化遺産」及び「明治日本の産業革命遺産（橋野鉄鋼山）」と、二つの国立公園、「十和田八幡平国立公園」及び「三陸復興国立公園」があり、加えて「三陸ジオパーク」と「みちのく潮風トレール」も設定されていることから、国内の観光客と訪日外国人観光客の誘致には有利な条件が揃っていることから、本県観光に対するニーズ調査を積み重ねることにより、当市へ足を向けていただける観光商品の造成に力を入れることが望まれる。

当市において各種産業と連携を図り、総合産業としての観光を今後も推進するに当たり重要となってくるのは、各種産業間や様々な団体との間を上手にマネジメントしていくことが特に必要となってくると考えられる。

そこで活用しなければならないものが「日本版DMO」である。地域と協同して観光地域作りを行う法人のことであるが、改めて日本版DMOの役割をみると、行政や、宿泊・飲食・文化・スポーツ・農林漁業・商工業・交通事業・環境事業等の関連事業者や地域住民等の多様な関係者を調整し、地域全体での戦略的な観光地域づくりや複数地域の広域的な連携を主導していくことと記されている。

県からは、「三陸DMOセンター」の取り組みについて説明されたが、当市でも、「(公益財団法人)さんりく基金」が運営する、「三陸DMOセンター」に参画していることから、久慈市の地域振興と観光振興のため、このDMOを今以上に活用する必要がある。

しかし現状では、当市としてせつかくの「三陸DMOセンター」をどの程度まで、活用できているかといえ、ほんの僅かの関わりであることから、早急にDMOについて考える必要がある。

日本版DMOには、東北地域や関東地域のような大きな、「広域連携DMO」と、岩

手県の沿岸地域自治体等が参画している、「さんりく基金」が運営するような「地域連携DMO」と、久慈市などの単一の自治体などだけで創るような、「地域DMO」の三つの形態に分類することが出来る。

これまでの当市の観光部署や観光協会が取り組んできた誘客も当然大事ではあるが、久慈市全体が観光によって地域課題を解決し活性化していくような、実施主体としての久慈市単独での「地域DMO」登録へ舵を切っていくことが、当市観光産業を発展させるための新たな方向性と考えることから、官民・産業間・地域間との持続可能な連携を図るためにも「地域DMO」の構築を考えるべきである。

#### ○ 沿岸地域の観光産業について

「みちのく岩手観光立県第3期基本計画」を説明する過程においては、当市を含めた沿岸地域の観光入込数や三陸ジオパーク、三陸防災復興プロジェクト 2019、ラグビーワールドカップ 2019 等、沿岸地域における現状と今後の大きなイベントなどに触れられた。また、観光地づくりの推進や観光消費の増大など何点か課題も示され、県としての沿岸地域活性化の方向性が示された。

施策としては、沿岸地域の固有のコンテンツを生かした復興ツーリズムの促進や北いわての特性を生かした誘客の促進等の説明があったが、観光はいろいろな産業との連携で成り立っていることから、それらを巧みに組み合わせることにより、これまであまり目を向けられなかった視点に気づくことで、観光振興を推進する方向性が見えてくると考えられる。

沿岸地域には、内陸部との大きな違いとして、海を有することが挙げられる。港湾があることは、観光資源としても最大限活用できるツールであることから、観光振興と併せ地域活性化にもつながるものと考えられる。

基本計画においても、クルーズ船寄港を活用した旅行商品造成による誘客と消費の拡大が示されているように、多くの観光客を一挙に地域内に流入させる手段として効率的でもあり、海外の客船を誘致することで、訪日外国人観光客の獲得にも有効であることから、現状の客船入港数をさらに増大させるよう県との連携を強化する必要があると感ぜられる。

また、質の高い旅行商品の開発と売込みが重要であるとの説明では、高付加価値型の

旅行商品造成の促進や、誰もが安心して旅行を楽しむことが出来る環境の整備などが必要とされたが、そのための具体的な方策までは示されなかったので以下で会派として考察してみた。

私たち「新政会」では、以前バリアフリーの観光推進について学んだことがあったが、三重県では、障がい者のみならず、誰にとってもやさしいバリアフリー観光の推進に向け、県民、観光事業者、行政が協働し、ホスピタリティに満ちた観光を磨き上げることを目標として活動、バリアフリー観光のニーズと将来性に着目しバリアフリースターセンターを設置、バリアフリー観光全国フォーラム開催や障害者モニターツアー、バリアフリー観光ガイドブック作成などを積極的に推進していた。

また、バリアフリーのバリア（障壁）は、身体的なバリアのみならず、海外から観光で来日する外国人への言葉のバリアも含まれることから、訪日外国人観光客に対応できるバリアフリーを検討するなど、ホームページ等の多言語化や、Wi-Fiも必須であり無料Wi-Fiポイントの増加も図られていた。

観光に関わるバリアフリーにおいては、観光施設や公共施設内のバリアフリー化や歩道等のバリアフリー化は無論のことで、人材やソフト面でのバリアフリー化も併せて進めることが、本来の誰もが安心して旅行を楽しむことが出来る環境の整備に繋がっていくものであると考える。

さらには、バリアフリースターセンターとして、観光客がどのようなバリアを持っているか、どのようなツアーを希望しているのかを把握することにより、障がい者等のバリアフリー観光のニーズを的確にとらえることの重要性が感じられることから、本市においてもバリアフリースターセンターを設立できるような環境を整えることが、久慈市の観光産業の振興に必要であると考えます。

久慈市としては、県北地域のみならず沿岸地域全体のリーダーシップを取り、本市を含めた沿岸地域全体の観光産業についての方向性をどのように推進していくか考えていかなければならない。

#### ○ 三陸鉄道と観光産業の関わりについて

久慈市総合計画の重点戦略では、「みんなに愛されるマイバス・マイレールプロジェクト」として、市民バスや三陸鉄道を公共交通機関として意識付けを図り、必要性や

意義などを理解することとしている。

特にも、地域公共交通網の形成に重要な役割を果たしている三陸鉄道は、道路が無い箇所からの眺望を体験できること、参加者全員がゆったりくつろぎながら移動できる等、バスや自家用車では味わえない観光のツールとして利用できることから、観光資源として三陸鉄道のさらなる活用方法を検討することが必要である。

県では、大型イベントが続く本年は、三陸鉄道を新たな交通ネットワークとして活用し、キャンペーンとして『いわて幸せ大作戦!!～美食・絶景・イベント「黄金の國、いわて」～』を開催、「発見!!体験!!」をコンセプトに三陸鉄道関連では、各種臨時列車の運行及び企画列車の運行や体験コンテンツと組み合わせた旅行商品の造成等に取り組み、周遊・滞在型や高付加価値型の旅行商品の開発・売込みを促進し、誘客及び観光消費の拡大を図るとしている。

このような状況の中、平成31年4月23日には、久慈駅から盛駅までが、リアス線として一本のレールで繋がったことで、日本最長の第三セクター鉄道として鉄道ファンのみならず、一般の観光客にも注目されると考えられる。これは沿岸地域の観光産業を活性化することが出来る一つのツールとして捉えることができ、出資者として関わる本市としても、これからの三陸鉄道を久慈市の観光産業の発展とどのように関連付けていくのかさらに研究を重ねる必要である。

## 視察研修内容 (2)

日 時	平成 31 年 5 月 8 日 (水) 午前 10 時 00 分～午後 11 時 45 分
視 察 地	気仙沼市役所 (大島)
視察先住所	宮城県気仙沼市八日町 1 丁目 1-1
応 対	宮城県 気仙沼市議会 議長 菅原清喜 様 宮城県 気仙沼市議会事務局 庶務係 主査 吉田瞳 様 宮城県 気仙沼市産業部 観光課 施設管理係 主査 小松翔太 様
説 明 者	宮城県 気仙沼市産業部 観光課 施設管理係 主査 小松翔太 様 三陸ジオパーク気仙沼推進協議会 運営委員長 豊田康裕 様
視 察 目 的	三陸ジオパークについて

### 概要 (三陸ジオパークについて)



- 気仙沼市議会議長・菅原様より歓迎のご挨拶をいただく

- 澤里会長よりお礼のあいさつ



- 研修一カ月前の平成 31 年 4 月 7 日に開通した「大島大橋」

## 概要



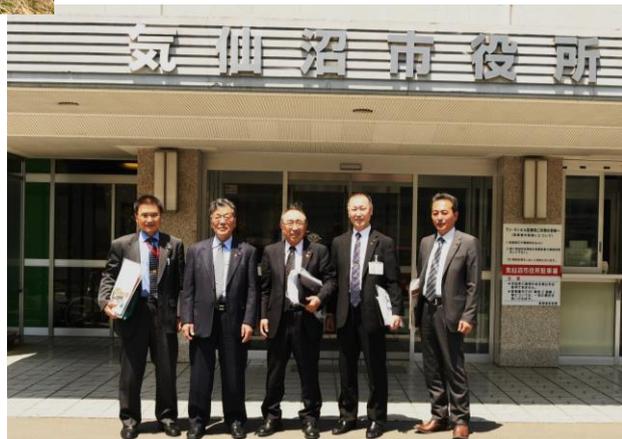
- 大島に移動して、三陸ジオパーク気仙沼推進協議会運営委員長豊田様から大島の成り立ちの説明を受ける

- ジオサイトに設置してある看板を利用した説明



- 手作りのパネルは、説明を受ける人に分かりやすい道具となっている

- 気仙沼市役所に戻っての集合写真



## 所感

### ○「三陸ジオパーク気仙推進協議会」の活動内容について

三陸ジオパークは、青森県八戸市から久慈市を含む岩手県の沿岸全てと宮城県気仙沼市まで、約 300 kmにもおよぶ日本一広大なジオパークであるが、平成 29 年度の再認定審査において、「運営体制が脆弱で、活動目的が住民と共有されていない」との指摘を受け、条件付きの再認定となり、二年後の本年秋に再び審査を受けなければならない現状である。

岩手県が主導する「三陸ジオパーク推進協議会」では、広大であることで地域間の連携が思うようにいかない状況であることから、平成 30 年度よりジオパーク対象エリアを北部・中部・南部の 3 ブロックに分け、各地域内の連携が強化されるよう活動に取り掛かっている。

それらエリアの中で、南部エリアの南端玄関口として、独自のジオパーク推進協議会である「三陸ジオパーク気仙沼推進協議会」の設立やガイド養成などを行い、ジオパークを観光と結び付け活動している気仙沼市の取り組みを研修した。

行政主体の市町村協議会の設立は、「三陸ジオパーク気仙沼推進協議会」が三陸エリアでは初めてで、各観光協会・教育関係者・ガイド団体などにより構成されている。

説明において、目的としては、気仙沼市域の貴重な地形・地質について保全・研究し、観光振興で持続的な発展に寄与することとなっているとのこと。また、具体的な事業では、大地・化石・植物の観察、砂金探しや金の文化についての学習、新聞・広報誌などを積極的に活用したイベントの情報発信に努めていることなどから、意欲的に地域の資源を取り込んだ活動を行っているように感じられた。

特にも、奥州藤原氏の都・平泉の黄金文化を支えたとも伝えられる鹿折金山が資料館としてあるように、古くから金を産出していた地域であり、金山の文化と歴史を伝えることにより、地域の観光資源としてのジオサイト活用がなされていると思われた。

当市の場合の地域協議会については、民間主導の地域団体としての設立を見てみると、三陸沿岸地域において気仙沼市より早い段階での設置ではあったが、民間主体であることから、参画している事業所及び各団体・個人の会費のみの運営では、資金的

に脆弱で活動が限られていることから、当市内ジオサイト間の緊密な連携までを構築することを主導できていないように感じられていた。

しかし、再認定となったことで、県として三陸ジオパークに本腰を入れざるを得ない状況となり、3ブロックに分けて活動したこともあり、当市が含まれる北部ブロックにおいても市町村主体の協議会が設置され「三陸ジオパーク」としての活動が積極的になったように感じられる。

当市でも広域市町村と一緒になった協議会のみでの活動ではなく、久慈市単独での協議会を設立することで、より地域に密着したジオパーク活動が推進できるものと思われることから、三陸ジオパーク再認定に向けて多くをアピールすることと、久慈市内での今後のジオパーク活動をますます活発化させるためにも、久慈市行政主体の久慈市ジオパーク推進協議会の設立を望むものである。

#### ○ジオパークガイドの養成とガイドの活用について

日本ジオパーク委員会の再認定審査の中では、「三陸ジオパークが提供できる知識と経験は重要である」との意見を受けていることから、陸中海岸国立公園としての活動や度重なる被害を体験した大津波の経験から、地球規模の大地の活動や景観の変化など多くの知識が蓄積されており、その知識を三陸ジオパーク地域以外の皆様にも伝える市民活動を推進するためにもガイドの養成と活用は必要不可欠である。

「三陸ジオパーク認定ガイド」制度は、平成28年度からスタートし、平成29年4月には、新たな「三陸ジオパーク認定ガイド」が誕生している。認定ガイドは、ジオパークに関する知識を有するだけでなく、お客様を安心・安全にジオパークを体験できるよう案内し、楽しませるガイド技術を有し、三陸ジオパーク推進協議会と活動をともにする方々を認定している。

認定ガイドになるためには、三陸ジオパーク推進協議会が主催する講座や講習会を受講し資格を取得する必要があるが、気仙沼市では、三陸ジオパーク認定ガイド講座や三陸ジオガイド南部研修交流ツアーを隣接する陸前高田市と連携して開催するなど、ジオパークガイドの養成に努めている。しかし、現状の認定ガイド数を見た場合、南部エリアでは、まだ認定ガイドは3名であり、北部エリアの6名、中部エリアの14名に比して少ないと感じられた。

そのような状況ではあるが、三陸ジオパーク認定ガイドの講座において講師も務められておられる、三陸ジオパーク気仙沼推進協議会運営委員長・豊田康裕様から大島のジオサイトに移動して、現地でのジオパークガイドを行っていただいた。

大島は気仙沼湾内に位置する有人の離島で、内地との往来はこれまでフェリーの利用であったが、研修で訪れた一カ月前の、本年4月7日より大島大橋の完成により車両による通行が可能となった。島の南端に位置する龍舞崎（たつまいぎき）は、海食による奇岩を望むことができ、付近の露頭には、中生代ジュラ紀のアンモナイト化石が産出されるなどジオサイトが点在している。

豊田氏のジオガイドは、現地においても大きな地質図を広げ特徴的な岩石を取り出しでの説明や、自作の説明パネルの使用と聞く人へ分かりやすい説明など、ジオガイドとしての資質を十分発揮しているものと感じられた。このように優秀なガイドの説明を体験することは、今後当市のジオパーク認定ガイドやジオ以外のボランティアガイドの養成に関わる際必要となるものであると感じられた。

広大な三陸ジオパークは、北部・中部・南部の3ブロックに分けて活動を始めている分けだが、三陸ジオパークの認知度・認識を更に高めていくために、「三陸ジオパーク認定ガイド」を当市も含め各ブロックとも増やしていく必要がある。

ジオパークを利用して地域内を活性化させるために、ジオパークガイドの養成とガイドの活用は重要な課題であると感じられるが、認定されるガイド以外であっても、個々のジオポイントについての知識や経験を十分に備えた市民がいることも知られていることから、それらの市民をガイドとして活用していく仕組み作りが求められていると思われる。

当市においては、「久慈市ガイドの会」が設立され、認定ジオパークガイドとは別の視点から、久慈市の自然、歴史、文化及び風土などの観光資源を久慈へ来られた皆様にご紹介し、久慈市の観光振興及び地域活性化に寄与することとしているが、その活動は、まだ始まったばかりであり、予算的支援を含めた久慈市行政のバックアップが必要であると感じられる。

#### ○ジオパークを活用した交流人口拡大について

気仙沼市は、ジオパークを観光と結び付けることにより、常住人口に比して交流人口

が多様な県内有数の交流拠点の一つであると捉え、当市の三陸ジオパークを活用した交流人口拡大への一助となる研修を考えた。

ジオパークの目的は、多くの人が将来にわたって地域の魅力を知り、利用できるよう保護をした上で、ジオサイトを教育やジオツアーなどの観光活動などに活かし、地域を元気にする活動や、そこに住む人たちに地域の素晴らしさを知ってもらう活動を行うものである。

このことから、国内の人口減少による各種課題から、各地域では、ジオパークに認定され知名度を上げることにより、交流人口を増加させることで地域の活性化を目指すことを一つの施策としている。

現状ではジオパークに認定されたからといって、急激に観光客が増加するわけではなく、ジオパークを各産業や観光と結び付けることにより、交流人口として誘客することが地域を経済的に活性化させることに繋がってくるものと感じられる。

気仙沼市の交流ツアー等の意見では、テーマを変えての交流の取り組みや観光客だけではなく市民へもジオパークの理解を深める活動、他地域への情報発信の不足などが挙げられたとの説明であった。

ジオパークを活用した交流人口の拡大へは、ジオパーク案内板やジオサイト現地への解説板設置、パンフレットの充実と、観光客が参加したいと思うジオツアーの創設など、ジオパークをさらにPRすることも当然必要ではあるが、加えて、当該地域住民のジオパークへの意識の醸成が最も重要であると考ええる。

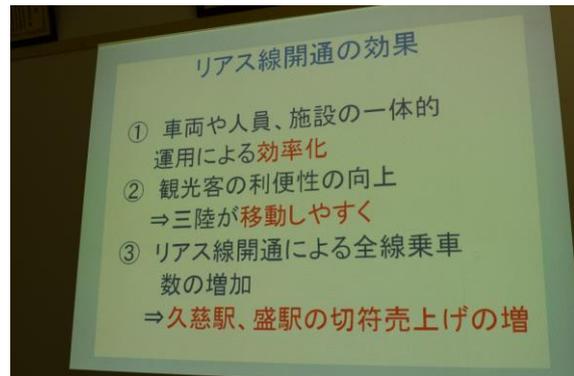
人口減少は、地域内の消費活動を小さくし、やがて生産活動の停滞にもつながっていくことから、地域経済を活性化するためには、地域外からの「交流人口」を増やすことが必要である。当市の交流人口を増加させるために、観光資源として、「三陸ジオパーク」を今以上に活用することが必要であり、市として多方面に渡り積極的に関わっていく必要があると思われる。

地域の交流人口が増加すれば、宿泊や食事さらに土産品の購入等、地域内での消費活動が活発となり、地域経済に寄与することが期待される。交流人口を増加させる手段としては、通勤や買い物、スポーツなどいろいろあるが、観光に関わる交流人口が最も効果的だと考えることから、今後の交流人口を増加させる施策としては、ジオパークの活用を取り入れる必要があり、最終的には、当市の地域振興へ繋がってくるものと考ええる。

### 視察研修内容 (3)

日 時	平成 31 年 5 月 9 日 (木) 午前 9 時 00 分～午前 11 時 00 分
視 察 地	三陸鉄道株式会社
視察先住所	岩手県宮古市栄町 4 番地
応 対	三陸鉄道(株) 代表取締役社長 中村一郎 様 三陸鉄道(株) 事業本部長兼総務部長 村上富男 様 三陸鉄道(株) 運行本部 旅客営業部長兼統括駅長 橋上和司 様
説 明 者	三陸鉄道(株) 代表取締役社長 中村一郎 様
視 察 目 的	三陸鉄道リアス線開通について

#### 概要 (三陸鉄道リアス線開通について)



- 中村社長自らスライドを使用し説明いただく  
真剣に説明に聞き入る会派の各議員



概要



● 中村社長と和気あいあいの中での質疑応答



● 中村社長の説明後は、村上事業本部長と 橋上運行本部長にも同席いただいた

## 所感

### ○ 南北リアス線統合によるメリットについて

久慈市総合計画の重点戦略では、「みんなに愛されるマイバス・マイレールプロジェクト」として、市民バスや三陸鉄道を公共交通機関として意識付けを図り、その必要性や意義などを理解することとされている。

特に、地域公共交通網の形成に重要な役割を果たしている三陸鉄道は、JR線の宮古から釜石間が三陸鉄道に移管し、久慈駅から盛駅までがリアス線で一本につながり、当市の観光資源として三陸鉄道のさらなる活用方法を検討していかなければならないことから、南北リアス線統合によるメリットについて研修することで、久慈市の観光産業への施策を提案できるものと考えた。

研修では、中村社長自ら直接スライド等を使用し、震災被害から復旧を経て全線の一本化までを説明をいただいたが、ここでは震災復興については省くこととする。

説明では、三陸鉄道は観光資源になっていると考えているが、地域の足として地元の皆様の利用増加を期待しているとのこと。平成30年度の南北リアス線の利用者合計は前年度比横ばいで、50万人を多少超えた程度であるが、令和元年度は、南北リアス線統合を勘案し、倍増を見込み110万人の利用者目標を設定している。

開通後一カ月を見ても、久慈駅・盛駅の切符売り上げの増加がみられることで、全線乗車数の増加が期待できるとしている。

また、統合されたことにより、車両や人員、施設の一体的運用による効率化が図られ、さらには、観光客の利便性の向上として、三陸地域を移動しやすくなると考えているとの説明である。全線が繋がり、JR山田線の宮古・釜石間が新しい区間として加わったことにより、新たなお客様を迎えることができることで、観光資源として三陸鉄道の利用者増加が期待されるものと考えられる。

また、震災被害により8年間利用できなかった鉄道の復活とリアス線としての一本化は、全国的にも関心度が高いことから、マスコミに上手く取り上げられるような情報の出し方を準備することで、広告費をかけないPR方法を考えているようである。

### ○ リアス線と観光の関わりについて

三陸鉄道リアス線は、県としても鉄道会社としても有力な観光資源と捉えていること

から、発信力・広告塔として活用、学びの場として活用、健康づくりに活用、周辺観光の移動手段だけではなく、イベント列車としてリアス線に乗ることが主な乗車目的となることを考慮した事業を推進するようである。

主なイベント列車として三陸鉄道では、現在でも、お座敷列車や花見カキ列車など数多くのイベント列車を運行しているが、今後、子どもたちに人気のアニメとのコラボ列車や、一本につながることで長距離区間の運行となったことから、夜行列車の運行、「新御座敷列車」と「新レトロ列車」を活用し、さらにイベント列車については力を入れるとのことである。

近年では、沿岸の大型港湾を有する自治体による大型客船の誘致が多数みられることから、客船の乗客が三鉄を利用して沿岸地域を移動できるように他のイベント等、特に本年は、三陸防災復興プロジェクトとラグビーワールドカップが開催されることでのお客様の取り込みにも対応できるように企画を進めているとのことであった。

また、イベント列車としての車両活用のみならず、地域ごとにある個性豊かな駅舎の活用を図り、地元住民及び交流人口である観光客の誘客を促進する方策も考えられている。移管された宮古・釜石間では、大槌駅がある。旧駅舎は、東日本大震災時の大津波により大規模な被害を受け、路線とともに営業休止となっていたが、JRから三陸鉄道に移管されることに伴い新駅舎を整備された。

建物は地元自治体が整備し、民間事業者の大槌町観光物産協会が三陸鉄道から乗車券類の発売を受託する簡易委託駅となっている。駅舎内には、飲食店が設置され日中はラーメン店、夜は居酒屋として地元の若者二人が営業している。陸中山田駅も同様の被害を受けており、新駅舎は山田町観光協会が受託しており、観光案内所や大震災からの復興までを紹介するコーナーを備えている。

他にも、統合以前の北リアス線と南リアス線の駅も被害にあっているが、新たな駅周辺には再建した飲食店が並ぶところも多く、地域づくりとして新たな街の拠点となることが期待されるように、三陸鉄道の黒字化だけではなく、リアス線の統合が観光による地域経済発展にまで波及することにより、まち全体としての黒字化・地域振興を実現できるように考えた三陸鉄道リアス線であってほしいものである。

今回の三陸鉄道の研修には、会派の新たな取り組みとして、三陸鉄道利用者への「観光アンケート」を行った。当市では2019年度から2023年度に向けての、「久慈市地域

公共交通網形成計画」策定しているが、その中の資料で、5月連休中のアンケート結果を見ると、回答者の7割以上が観光目的で久慈駅前において、3割は三陸鉄道を利用するとの結果が掲載されている。

この調査からもわかるように、三陸鉄道の観光での利用者は、相当数あることがわかるが、市内観光地への二次交通が現状ではほぼ無いことから、久慈市の施策として早急にその対策を考える必要がある。

新政会では、三陸鉄道が久慈から盛まで一本化での運行となったことで、三陸沿岸地域の観光、特に久慈市観光への好影響が期待されるものと考え、三陸鉄道本社への研修とリアス線全区間の乗車を体験し、三陸鉄道一本化がもたらす観光への波及効果を検証することとした。

会派内の事前検証においては、ビックデータ等を活用し、当市への移動方法や出発地等の動向調査を踏まえ、実際にリアス線を利用する場合の目的地や三陸鉄道の感想等意見を得ることにより、当市観光振興への糸口の一つを見つけることを目的に、三陸鉄道様から駅や車内での乗客へのアンケート許可を得て会派議員で分担し調査を行った。

平日の調査であったため、思ったほどのアンケート回答が得られたわけではなかったが、三陸鉄道への満足度は高く三陸地域に又来たいとの回答が多くを占めた。

今回の研修における観光アンケートでは、提言に繋げることが出来るほどの回答数を得られなかったことから、今後同様の調査を行うにあたっては、乗客が多く乗る時間帯の調査やツアー列車・イベント列車の乗客へのアンケートを考えなければならず、事前の準備をさらに充実させる必要性を感じた。

中村社長の説明の後には、村上事業本部長と橋上運行本部長にもご参加いただき質疑応答を行ったが、会派議員からは、中吊り広告・Wi-Fi・トンネル内の利用方法・二次交通拡充の必要性・健康に関わるイベント列車・ペットや自転車の持ち込み等、三陸鉄道をさらにお客様から利用していただくための所見が数多く出され議論されたところである。

また、三陸鉄道とJRの久慈駅について、現在久慈市で複合施設を建設しているが、鉄道会社として、その施設を一部でも利活用できるような施策を久慈市と協議してほしいことや、駅構内のバリアフリー化・乗降口の移設等も質疑された。

研修の目的は三陸鉄道にあったが、三陸地域の公共交通を利用した移動を考えていることもあり、気仙沼線・大船渡線BRT（バス高速輸送システム）にも乗車し、検証した。国土交通省では、「連節バス、公共車両優先システム、バス専用道、バスレーン等を組み合わせることで、速達性・定時性の確保や輸送能力の増大が可能となる高次の機能を備えたバスシステム」としている。

気仙沼駅から盛駅まで1時間20分の乗車時間は、多少長く感じられたが、BRTの性質を考慮し、地域住民の足として考えた場合は、多くの不便さは感じられないものと思われる。東日本大震災により被害を受けた気仙沼線・大船渡線について、早期に輸送サービスが開始され、鉄道敷をBRT専用道化、役場・病院・商店街・学校・仮設住宅の位置を踏まえ、市街地内に駅を新設・移設したことは、被災地域住民の利便性の向上が図られ、被災地の復興の一助になっているものと感じられた。

三陸鉄道と県・沿線自治体の協力のもとに、日本最長の第三セクター鉄道となることから、鉄道ファンのみならず、ゆったりと旅をする一般の観光客にも人気が出ることで、当市の交流人口増加を後押しすることにより、当市の観光産業がそれ以外の産業を巻き込み、総合産業として振興されることを念願するものである。



領 収 証

新 政 会 殿

No. 038546

平成 2019 年 5 月 14 日

¥ 143,120-

(現金・振込・小切手)

内 容	種 目	旅行年月日	行先(又は品名)	内 訳
	旅費	5/7~9		

上記金額正に領収致しました。



岩手県久慈市川崎町16-5  
 株式会社 岩手県北観光  
 久慈支店 長 帷子 靖洋  
 TEL (0194) 63-5221



※金額訂正又は極者印なきものは無効

2019年4月23日 発行

〒 028-0051

401119050033 NO. 19 - 000002 - 001

岩手県久慈市川崎町1-1

観光庁長官登録旅行業第2012号  
株式会社岩手県北観光  
久慈支店

久慈市議会 新政会 御中

TEL:0194-52-2188

請 求 書

028-0051  
岩手県久慈市川崎町16-5  
TEL0194-53-5221 FAX0194-53-5222

行政視察

支店長 帷子 靖洋 印  
担当者 植野 真由美 印

について、下記のとおりご請求申し上げます。

月日	摘要項目	備考	数量	単価	金額	消費税等
05/07	交通費運賃 レンタカー レンタカー WA775 1日+5時間		1	33,230	33,230	内税8%
05/07	交通費運賃 レンタカー 久慈⇒気仙沼 乗捨料金		1	8,640	8,640	内税8%
05/08	交通費運賃 JR 新井⇒盛 JR大船渡線		5	950	4,750	内税8%
05/08	交通費運賃 私鉄 盛駅⇒宮古駅 三陸鉄道乗車券		5	2,270	11,350	内税8%
05/09	交通費運賃 私鉄 宮古駅⇒久慈駅 三陸鉄道乗車券		5	1,850	9,250	内税8%
05/07	宿泊費 一泊朝食 ホテルグランテラス仙台国分町 シングル		5	7,500	37,500	内税8%
05/08	宿泊費 一泊朝食 宮古セントラルホテル熊安 シングル		5	6,600	33,000	内税8%
05/07	取扱料金 取扱料金		5	1,080	5,400	内税8%
小 計					143,120	0
【備考】					旅行代金	143,120
御振込先					お預り金額	0
北日本銀行					ご請求合計	143,120
久慈支店					お手数ですが、手数料はお客様にてご負担願います	
普通 口座番号 3328871						
口座名義人 岩手県北観光						